

# 技術・家庭科（家庭分野）の主張

## 1 教科で育みたい人間像

私たちを取り巻く生活環境は、日進月歩の勢いで進む技術革新や、さまざまな社会問題（少子高齢化・待機児童）に伴うサービス形態の多様化といった要因により大きく変化しています。

このような生活スタイルの変化は、先人たちが知恵を出し合い、便利さや快適さを求め、豊かな生活を生みだしてきた歴史そのものと言えるのではないのでしょうか。私たちの考える「豊かな生活」とは、誰もが暮らしやすい生活のことです。そして、そのために大切になるのが「自分と他者のた

めに便利にしたい」という目的意識にあると考えます。つまり、今の生活を見直しながらも、今後、自分たちがどのように生きていくのかを想像し、よりよいものを構築していくことが求められている社会に子どもたちはいるのです。

そこで、自分たちの生活に直接関わることの多い、技術・家庭科では、新たな時代を切り拓くとともに、環境の変化にも柔軟に対応できる人になってほしいとの願いから、「豊かな発想でよりよい生活を創りあげる人」を育みたいと考えます。

## 2 私たちが大切にしたいこと

家庭分野では「豊かな発想でよりよい生活を創りあげる人」を育むために、「誰のためか」を明確にし、他者の視点を自分の視点に加えて「ひと・もの・こと」を見直していく姿を大切にしたいと思います。

この姿は、「誰にとっても安心で安全」という視点にたつて、「自分にとってよい暮らし方」と「他者にとってもよい暮らし方」の矛盾がより少なくなるように自分の考えと仲間の考えをすり合わせて発想を広げたり、深めたりしていく姿といえるでしょう。

しかしながら、どんなに身近な存在であっても、自分にとって当たり前であることが、相手にとっても当たり前であるとは限りません。そこで、まず自分と他者の考えの違いを知ることが、他者とかかわるための前提条件となるでしょう。そのうえで「よりよい生活を創りあげる」ためには、自分と他者の違いをふまえ、「誰にとっても」という視点で考えをすり合わせる必要があります。

この「すり合わせ」にこそ、「ひと・もの・こと」を見直し、「よりよい生活を創る」ための要素（考え）があるのでしょうか。まずは、出された要素（考え）をさまざまな立場で見つめ、仮説を生み出す必要があります。仮説ができると、それを検証することになりますが、家庭分野においては、実習・実験や観察などがその機会となります。検

証から得られた実感は自分と他者を実体験から結びつけるだけでなく、「よりよい生活を創る」ための選択肢を広げたり、具体的なイメージを構築したりすることになるでしょう。

私たちは、このような流れを授業の中にも生み出したいと考えています。そこで、題材を選定する際には、「誰のためか」を明確にして、身近な他者とかかわり、一緒に生活の豊かさを味わうことを大切にしたいと考えます。そして、そこでは現状を多角的に分析し、「誰にとっても」の視点で考えをすり合わせる機会を大切にすることや、子どもたちがすり合わせの結果生み出した仮説を丁寧に検証する機会を保障することを大切にしたいと考えています。

また、このような活動を支えるためにも基礎基本の習得が欠かせません。ここでいう基礎基本の習得とは、生活の営みにかかわる基礎的な知識や基本的な技術になります。これらは、便利さや快適さのなかで子どもたちにとってわかりにくくなっているため、あえて伝えたり、気づかせたりする必要があります。

このように「誰にとっても」の視点をもって、実習・実験や観察などの機会を保障するなかで、共に創りあげる実感を味わうことを繰り返して、「豊かな発想でよりよい生活を創りあげる人」を育んでいきたいと思ひます。